WASON
HQ
1104
J74

驛遞局認可

明治十九年六月五日發行

女學雜誌

毎月三回發兌
一冊正價四錢
一ヶ月十二錢

第貳拾五號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

A. Yononaka wo, nani ni tatoen, asaborake;
Kogiyuku fune no, ato no shiranami.

B. Teni musubu, midsu ni yadoreru, tsukikageno;
Aruka nakika no, yo nimo sumu kana.

C. The remedy is worse than the disease;
Ignorance does not avert the law.

女學雜誌第貳拾五號目次

●社說　婚姻のをしへ(下)
近藤賢三君の履歷

●新報　十三則

●叢話　料理に等級ある心得○日本婚禮の風俗集(四)○西洋婚姻談第二回○音樂の德

●佳傳　ウヰリアム女壻夫に貞なる事○橘逸勢の女の事○梅香女史の傳第九回

●寄書　陳言二則○敎育論○洗濯の心得○男女思のかゝれし○貧ん婆の注意○牛肉を食る事○詩歌十首

●附錄　內國女學校集報(一)

甲　世の中を何にたとへん朝ぼらけこき行く舟の跡の白波

乙　手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にも住哉

丙　(角を矯めて牛を殺す)　(無知も法律を免れず)

●婦人の稱呼　(一)

●母　おふくろ、かゝさん、かーちやん、おつかーとも云ふ又た西國にてかく、肥前にておひい(阿妣なるべしとの說あり)、羽前にてだゝと云ふ

●妻　さい、つま、によぼう、かゝ、其他國々のあまり言枚擧に遑あらぜ又た他人の妻を呼ぶにはおないぎさん、おいゑさん、ごりないさん、おかみさん、おくさまおうへさま等ゝの他諸國の方言甚はだ多し

●妾　せう、てかけ、めかけ、おもひもの、あしもと、とも云ふ又た西國にてごひ、奧州にておなめ、と云ふ當時は權妻とも云ふ

●寡婦　ごけ、やもめ、やまめとも云ふ又た尾張にてやごめ遠州にてつぐめと云ふ

●婢　えもめ、ぐじよ、かひ、おさん、やとひおんな其他諸國の方言甚だ多し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第貳拾五號（明治十九年六月五日）

●社説

○婚姻のをしへ（下）

○第三　當今の婚姻は血縁ちか過るなり　當今都地あたりの婚姻ハ茲に述る如き患もなきことなれども少しく田舎に入りて實際を窺へバ血縁と遠くすべしとの教ハ尚ほ今日に大切なる有樣なりろも〳〵氏なきはした女のにはかに玉の輿に乘り越陽の娘たちまち呉州の男に引かるゝなんどは素と不徳にして喜ぶべき婚姻にはあらざれども血縁の上より云ふときは斯るところ茲に述る如き患なきものゝ上乘ともすることなり然るに何屋の孫左衛門は何村の彦衛門と代々の親戚たるうゑ其の娘と息子とを夫婦とせバ一層の好みも深うなることなればとて双方の不得心をも壓して婚姻さするなどは現今尚ほ多く見る所の實事なるに其元と問へバ血縁の近きものと妻はすれバ何歟の利益も多きやう思ふにりの誤なれバ今まかゝる婚姻の大害あるのみならずかくて生れたる子供はゆく〳〵其身代を潰すべき大怪物なることを知らせ當今の弊風を一日も早く除かそるやうをつとむべし

其の理由を説かんには先づ血縁ちかきは相似ることの近きものたるよしと承知するを宜しとす世の中は素より一つ二つの理屈にて何事をも説明すべきものにはあらねど他人の猿似と云へることも實際にまゝあることなれども其大体を云ふときは親戚を以て尤も多く相似るものとは申すなり其有樣を云はゞ一本の樹木にても末にある枝と本にあるものと反てよく似たるもまゝあれども大抵は尤近きものは尤も多く似寄り枝すゑのはなるゝに隨て自らとほ〳〵しくなりて形の異るを常とするにたとふべし故に吾家に代々の惡病あれバ其親戚にも幾分かまた其氣色あり彼家の人に世々癇癪もちのくせあれバ血縁ちかき吾家にも氣短の氣風ありなど云ふことは實際に於て多く見るところなり又たとひ目に見心にそれとさとれぬ程ありとも理に於ても必ずかゝる似寄りあることなり然るに今まもし血縁近き男と女とをめあはせて夫婦とするときは其子は勢ひ父と母との双方に似寄るものゆゑ父よりも惡病の質を傳へられ母よりも亦た快らぬ病性をうけ母の癇癪に父の短氣をあはせてゆづりうけなんどせバ其子たるもの如何でか身体を丈夫に心を愉快にゆく〳〵立身出世すべき大丈夫賢婦人とあり得べきや云はゞ双方のはきだめとなりたるに均しかるべし然ればとて若し兩親にとも〴〵すぐれたる美質美性あらんには之を倍にしてゆづり受るにもあらざるやと云ふ人もあらん斯らバ幾分か血縁近きよりの害を消すの効能はあるべきとな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れども人間はもと不完全のものにて必ず一二の失ありなくて七癖とハ實際七つの落度ありと云ふことあれバ成べくは此失此の落度をうづめ合ふべきやうよして夫婦ともなり子をも産むとぞ宜しかるべし去れバたとひ親戚に美質美性の男女ありとも成べくハ他人中の美質美性ある人を擇びて夫婦とする方一層の利益あるとあるべし何れにしても血縁近きハ害毒の恐るべきものあるの理決して爭ふ可らざるなり

去れバ天の人を交ハらするや必ず異性をえらめり電氣の陰陽ハ陰と陰と相反し陰と陽とハ相密着し又陽と陽とハ相ろむく如く人も亦た性質ハ異り体質の違ふものを以て尤も互に愛するやうに思ハせ玉ふハ天の妙工と云ふべし故に温和なる人ハ活潑れ人と愛し鄭重の人ハ淡泊の質をよろこび沈默の夫にとしやべりの妻あり風流の妻君にむくつけき亭主ありろろつたる夫婦の少きものとは世のありさまを知らぬ愚言にてろろハずと見ゆるものなろ尤も深く相愛するものなり此たゞ心の上に就て云ふとにて彼の姫御前に似たる少將も亂暴なる五郎を慕ひ洒落なる虎ハ温雅の十郎を愛せりと云ふ鎌倉時代の引例も今の世にハ違ハぬ証據あるべし然れど体の上に就て云ふも亦た同樣にて神經質のやせ男は肥りたる妻君をもち蒲柳の夫人ハ强剛の夫に見え盃の夫婦の人間社會にも多きハ必竟此の爲なるべし天はかく異性異質のものを以て夫婦とし玉ふともと血縁とほきものを妻ハせをよろしとなし玉ふの趣なれバ成べくは親戚互に婚姻せざ凡そ重縁と云ふとハつねよ禁物のやうに思ふを以て惠ある父母の心得とハ申すなり

西洋にてハ夙に親戚婚姻の害毒あるとを論じたる人多く之をくハしう試驗したる學者も尠からぬとなりデバイ氏の實驗にてハ從弟同志めうとなりたるもの百二十一組の夫婦にハ子を産まざる者二十二人ありしと云ひ米合衆國の統計にてハ聾啞百人中ハ十八人盲目の百人中五人記臆乏しきものゝ百人中十五人ハ親戚婚姻のゆえより來りし病と覺ゆるの割合あり此他數名の証據あれども省く要するに此理あれバころかの親戚同種屬の婚姻のみを行ふ猶太人種には片環もの多く欧洲にて癩疾の尤も多きハ此の人種なりと云ふとなり我國の舊穢多が甚しき愚物となり又甚しき病人多かりしハ必竟平人に交濟するとを許されざりしゆえとも云へ其の仲間よて血縁近きものゝみ婚姻したるよりの害毒亦多きとなるべしされバころ穢多の人數ハ思ふ程に殖もせざ多く病にかゝりて死したるとなり此故に血縁を擇まて婚姻する者は其子を殺ものなり其身代をつぶすものなり子孫の計を爲さゞる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ものなり心あらんものゝ決して爲すまじきことなるべし田舍にて親戚なればとて緣を結ばんとするものはよく〳〵此理を心得なるべく其不心得を去るべし況んや親戚なればとて子供等の不得心をも壓へて婚姻さするをや尤も愚しきことと云ふべし

以上三篇は即ち當今の婚姻につき害の尤も甚しきものを擧たるなり吾雜誌の讀者は吾人の微衷を察して成るべく早く如此き弊害の減すべきやう盡力あらんことを切望す若し夫れ日本婚姻の改良策及その心得方の如きは前号より揭げつゞくる西洋婚姻談の畢るを待ちて更に說き分る日あるべし

● 近藤賢三君の履歷

明治十九年五月廿四日心友近藤賢三君忽焉として逝けり君十數日前來心臟に微痛を覺ゆと云ふ然れども君も余も共に其の激症たるを知らざるなり君心情鬱結して氣快ならずと云ふ余社務を理して共に箱嶺に遊ばんと約し其時來らずして君すでに去る此の日急使あり君の危急を報ず飛んで到るとき君すでに逝けり嗚呼余の君に於ける君と余との情念たゞ之を知る人の知る可らざるもの尤も多し相交りて以來七ケ年筆をとるに稿を分ち事を理するに務を半ばす君の余に於ける兄弟の間に異らざるあり然れども今はすでに亡し悲矣哉 君は遠州見附在森本村に生れ元と近藤玄貞氏の長男なり少にして大志あり十四歲にして報國隊に入り江戶に登る當時隊中尤も年若なるものは則ち君なり後ち大村益二郎氏の愛を顧りて其家に寄居し氏死するとき長谷川貞雄氏の護る所となる復た同氏の信をうけて一時其養子となり數年專ら獨逸學を修めたり明治十一年學農社に入て農學を修め十二年農業雜誌の編輯員となり初て文壇の上に登れり十三年中君暫く學業をすて反て放蕩の遊事を爲せりと雖も其情實を知る者はよく君の志を知れり余や當時初て君に交りよくその志を知るものなり君が當時農商務卿河野敏謙氏に面して建議したる遺稿余が手に存すもつて君が放蕩の爲にするところあるを弁ずべきなり此時以後君が爲す所にして余の知らざると尠く余の爲す所にして君の助を得ざるものなし農業雜誌は爾來君と余と協力して編集したるものなり小學雜誌は十七年夏以后ともに編輯したるものなり同年七月初て女學新誌を發行するや万事皆な之を與にしたり十八年五月議合はず修正社を退きたるも亦た同日なり其翌月女學雜誌を發行し今日に至れるも亦た君と余との協力なり此間余が農文温故、廢物利用、万國學術史の類を著はし編集の事務は一に君の助を乞へり余が材料新誌を發行するや亦大に君

の助力を辱ふせり大凡そ著譯出版の事にして吾人の企及したるものハ君表となりて余裏となり君外となりて余內となり事々に相協力せざるなし而して君今去れり悲矣哉。君ハ溫厚にして義氣あり且能く事務に長ぜり平生輕く言を發せず未曾て人と論爭せず然れども一旦斷決するや復た之を動す可らず居常義を見て勇み好で難に當り尤も慷慨れ事を喜ぶ然も幹理の任に長じてよく創業を計畫するの才あり故に禀質悉く余と表裏し內外の事一に相待て初めて完熟するを得たり而して君今ま去れり余之より何如せん。君は志を遠大に置て小成に安んぜざるの行あり今を距る五年君が二十八歲の時志ところを記して云く蘇堂淡水先生の目的ハ國會の議員となるにあり故に先づ十万圓の不動產を得るを切要とす之を得るには專ら殖利の事を執るをよしとす書生の殖利著作に若かず著作もし利を望まバ完美の書を得るかたし故に寧ろ名をかくして名を望まず屢バ小冊を發して第一着の望を遂せんと其の腹案するもの凡そ二十九種あり其中すでに世に出たるもの尠らず君の望正に達成の途にありて今やすでに逝けり天若し君に年を假さバ君が遠大の志必ず達して我國を益する亦た多かりしならん今茲三十二才にして歿す悲矣哉。此故に君が從來の著作ハ未だ君の才力を盡したるものにあらず反て其伸翼の一縮に過ぎざる者のみ然れども去年共に女學雜誌を發行し艱難を困厄の間に堪へて今日に至る共に約する所尤多く密に日本女性の改革を以て相許し共に計畫するところ尠らず此れ君が尤も力を盡したるの所にして余が君と志を同するの所亦尤も之に多しとす向後いよいよ此雜誌を改良し共に計畫したる所の者を發成して其望の目的に達するを得バ君ゆくと雖も聊か其靈を慰るに足らん歟。嗚呼余の君に於ける如此く切なり志望の相同き亦如此く密なり君の忽焉として永逝す悲怨之に過るものなし然も君ハ生前基督敎を信了するの地に至らざりしハ余の尤も痛恨するところなり人生朝露の如く散じて霧の如し噫悲矣哉。君が親友巖本善治淚を揮て記す

●新報

○なんだい節　本誌第十九号に流行うたと題して猥らなるなんだい節の禁止されんとを乞ひたれども其後ますます流行して今は其歌をうたひてうりありく者すらあるハ實に慨歎すべき極ミなり吾人は此頃子供の手を曳き乍ら此歌をうたひ大坂天滿の眞中で云々とれじらひもせで子供をなぐさむる母親の行を見思ハず潛然として淚にむせびたり斯る母親に育てらるゝ子供ハ例へ

ハ遊場所に淫辭をきゝ乍ら生ひ立つやうの者に似たり末に至りて淫奔に身をあやまらざるは必ず稀なるべし母たる者つねぐ不徳の言をきかせ乍ら反て其子のよからんことを望むハ尤も愚かしき心得と云ふべきなり吾人は此等の有様と觀再び當路れ人に注意を仰ぐもれなり

○女學校彙報　近來きゝ込たる報知を集めて左にかゝぐ

小川町の静女塾ハ追々手狭となるに付此度有志者の寄附金を請ひ資金も畧ぼ備はりたれハ遠からざるうち更に新築して共立の女學校と爲し玉ふ見込のよし

跡見女學校ハ規則とて一定したるものもなく又學期の年限に定もなく専ら生徒の方々に應じて教授あり師弟の間柄自ら他の校舍に異る所あるよし去れハ校を出でゝ他所に嫁し玉へる前日の生徒方ハ其家に歸らるゝよりは反て花蹊子の許に遊バるゝを樂しみとし今に至て尙ほ折々の教授をうけ玉ふ方も多しとぞ

明治女學校ハ近々統計學校のあとを借受て一層場所をひろめらるゝよし又先頃より日曜日ごとに安息日學校と云へるを開き洋婦人臨席ありて基督教の道を傳へらるゝとぞ

麻布の東洋英和女學校ハ生徒大に增加していよく手狭を覺えらるゝに付今年の夏休業中に横七間奥行十三間の三楷屋と新築し當今ハ謝絶し居らるゝ入校生をも容れ玉ふべき計畫ある由

小石川の長榮女塾よりは高等女學校の入校試驗に及第ありし生徒方の少からぬより同校に入らんとそる人々ハ主も此の塾に入り玉ふよし又た二本榎の頌榮女學校ハ高等女學校と同等なる教授を爲し玉ふよし

日吉町の東京府レース教場ハ平常八十人の生徒を定員とさるゝに今は五十名ありて欠員あるより遠らざるうち募集して入校を許さるゝ由又近日場則をも改めらるべきよしにきけり

築地の海岸女學校と十三番の女學校とハ共に異事なきよし尤も追々隆盛の運にすゝみ府下にて正則を學ぶべき女學校ハ先づ指と此二校に屈すべしとの評甚ぞ高し

森元の河村女校ハ教員に御差ありとかにて近來ハ生徒の來學を一時斷はり居らるゝよし

横濱のフエリス女學校は校長ブース氏の不在中とハ云へ諸役員及び生徒方の反つて共力の念をつよくさるゝより隆盛なると以前に異らぞ尙更にさうむとなりて入校の追々に增加する由

要そるに吾人の聞く所によれバ諸の女學校皆ひとしく盛運に向ひて一も衰退の兆なきハ必竟女學の追々に興起するもえにして國の爲め尤も慶賀すべきとなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○新女學校　伊藤總理大臣及び陸奥宗光兩氏の發起にて府下の本所邊に一大女學校を新に設けらるゝ計畫あるよしなり

○亡妻の姉妹　と結婚することを許すべきや否やと云ふことは數年前より英國にて議論ありしことなるが此頃の電報によれば上院の第二讀會にて其議案を廢棄したりとぞ

○草木花卉品評會　を去月廿一二の兩日横濱山手の共同公館にて開かれたり此會は婦人慈善會と同様の性質にて収入金を貧民に救助さるゝ目的のよし當日の景況は諸新聞に見えたれば畧す

○婦人交際會　横濱にては茂木、西村、等紳商諸氏の周旋にて婦人交際會と云へるを設け毎月各家順番に開くことになり先づ第一回を去月十二日茂木氏の別莊に開きし由

○朝鮮仁川の婦人　同港に居留せる我國の婦人は總計百九十八人ありて其うち十九人は外國人の妾なりとぞ但し密賣婬の全く絶えたるのみは賀すべきことと云へり

○仙台英語女學校　宮城縣仙臺にては春來ゼルマンレホルム派の宣教師なるホーエ氏が行きて男子の英語學校を設立せしが此度は本國亞米利加より二名の女教師の渡航するに付該所に於て女子の學校をも設立する筈なりと云へり（五月廿八日時事新報）

○婦人金蘭會　淡路國津名郡洲本の成田賢雄氏より來報に去月二十三日同會を開かれ事務所を同氏方に置れたるに追々入會の人あるよし其主意書は左の如し婦人に關する協會のかく追々に興起するは實に喜ぶべきことなり

抑も國勢の文野強弱は全く女子の掌中にあるなり故に女子たる者賢良なるときは其國自ら文明富強に進入し女子たる者蠢愚なるときは其國野蠻衰弱に陥るへし實に女子の國家に責任ある偉且大ならずや眼を開て吾國の現勢を察するに文明の泰西諸邦に譲るものは獨女子の蠢愚なるに原因するのみ嗚呼今日吾邦女子たる者豈奮勵以て智識を博め社會の實益を計畫せずして可ならんや因て妾等先茲に婦人金蘭會を開設し同志と共に毎日曜日會合して讀書談話の二會を開き互に智識を養ひ以て女子の本分を盡す所あらんと欲す乞ふ有志の婦女諸君速に入會あらんことを冀望す

明治十九年五月二十三日

發起人　成田きく子

贊成人　成田賢雄

○福岡婦人協會　の第三會は去月十五日に開かれ出席員四十三名にて神吉秀成氏（婦人の地位）上森さき女（題不明）の演説ありしよし

○京都看病婦學校　を設立あるよしにて趣旨書を配られたるを得たれど余白なきに付き次号に掲げ且つ吾人の意見をも附すべきなり

○岸田俊女氏　即ち今は中島俊と呼ばるゝ貴婦人より女子教育策の一端と題せる論說を寄送ありたれども都合により後号に掲ぐることとなしぬ讀者のちに其出るをまて

○福澤島田兩氏　は演說筆記を本号に掲ぐべき計畫ありしに其大意はすでに諸新聞に出でゝ少しく陳腐となりたるのみならず福澤氏の演說も此頃の時事新報に男女交際論と題して續々掲げ出さるゝものと同樣なりしゆえに共に其掲載を見合せたり但し此の交際論は出で了るを待ちて本誌に批評するところあるべし

●叢話

○料理に等級ある心得

此雜誌の第十一、十二、十四の三号に料理の心得方とくはしく述べ置たれば讀む人は定めて御覺あることならんすべて料理は婦人の第一に心得べきことにて甚だ大切なる技藝でありまするゆえ西洋にては余程かしましき議論ありて此頃は料理學校と申すものも出來貴婦人娘樣方も馬車に乘つて其學校に行き肉を切り汁を調ふるなどの稽古をさるゝもあり或は自宅に其敎師を招ひて學ばるゝもありと云ふことなり故にたとひ如何程に貴き身なりとも一通りを習ひおきてお三下女を使ふ心得とせること大切なりさて今回は料理に等級ありと申す理を述べませう等級とは上下の段々にて料理に上方のもあれば又下方に適するもありすべて食物を旨まく食べんと云ふことが料理の一の目的なる上は之と食ふる人々の身分等級にしたがひて鹽梅を致さねば華族方にも無上の風味ありと申す料理も下々の煮込と食ふ下人には口にあはぬと申されませう去れば客人は身分と考へて料理し家内の地位を考へて鹽梅しよく〳〵食ふ人の有樣にしたがひて等級をあす心得かたが大切なり此につきてむかし坪內某と申せし料理に名高き人が信長公の口に適はせたる面白き話がありますもと此某と云ふは三好長慶に使へし料理にも余程熟練したるものなりしかば信長に捕れたるのち此上の御惠みは何卒殿の料理方を御命じ被下て切てもの御役となさせ玉へと言上せしかば然らば今夜の膳物を調へよとの仰せに恐まりて秘術をつくし料理してさし上たるに信長公は何れも口に適はずとて以の外に怒られたれば某も心にさとる所ありて然らば何卒今一度御仰くだされたし此度御口にかなはずば如何やうなさるゝとも苦う候はずと再應の料理となしさゝげたるに此度は大に口にかなひたりとてほめそやし玉ひ天晴の手のうちとていろ〳〵の褒美を賜はりたりことぞ之をきくに初めの料理は三吉家にてはつね〴〵行ふ等級にて第一番の料理なりのちに試みたるは第三番の料理にて余程下等

の擶梅なりしとぞ斯ばかり口によりて好みの違ふものゆゑ料理に等級ある趣をよく心得て客人の身分により仕方を違ふるが宜ひとであります

○日本婚禮の風俗集（四）

吾人が此を掲るものも如此き悪風の尚存し若くハ其れ遺習の尚まゝあるを知らせて一日も早く除去せんことを希ふが故にあり本誌第二十二号の緒言を一覽して本志を誤り玉ふ勿れ

相州大隅郡公所村の婚禮風習に就き實際を目撃せし者の話をきくに同所にてハ毎年大晦日の朝年内に結婚せし新夫新婦を遇する一奇習あり先づ村内に一所を撰び葦簀を張り席をしきて座を設く村内既婚れ若者等は生藁一束計を取て打擲器を作り式場に待付新婦の來るや之を捕へ衆人の目前に於て尻を打つ打手を二人にて一婦を打ち一人各五度に限ると云ふ此風習たる新婦にとりては最も忍ぶ可らざることなれども到底一度ハ免かれず亦打手ハ其婦が平常交親の情如何によりて緩くもなし強くも打つ由にて悪まれたるものハ自然に酷遇を受く亦新夫ハ同日村中の若者に胴上をされ田圃の中を擔ぎ回はされ水溜などへ落されなどして全体泥土に塗され殆んど死に至ることとあり往時ハ是が爲め殺されしものありしよし當時ハ追々此風習ハ稀になり行くと云ふ當日此式を見物せんとて近村の老弱男女ハ式場の周圍に群集す（渡瀬荘三郎君）

信州佐久郡邊にてハ新婦の夫家に來入する時門内にて同道の媒妁及び親戚等と分れ獨り媒妁の婦にさそハれて裏手に廻り勝手口に至る勝手口にハ童男童女麻殻にて造りたる松明を持て左右に立ち新婦を迎ふ新婦ハ其間を通り將に堂に上らんとするとき家婢冷水一椀を盆に載せ新婦に捧ぐ新婦うけて之を呑み然る後婚儀の席につくを禮とす松明を持ちし童男童女は婚席に於て雌蝶雄蝶の銚子をとるものなり又其松明ハ新婦の通過せしのちに合して一束となし燒盡すとなり土人の言によればバ新婦の嫁するハ父母の家に死して夫家に生るゝなり故に父母の家を出しより夫家の勝手口に至るまでハ凶禮を用ひ勝手口にて冷水を呑み初めて蘇生し夫より吉禮に從ふなりとぞ（神田孝平君）

淡路國津名郡潮浦邊にてハ結婚をなすに下婢を置たるとの心得にて双方約束をなし女子を娶りて假りに夫婦となり男子の氣に入れバ妻となし入送籍の取扱をなし諸道具を送り納る若し男子の氣に入らざれバ直ちに出し已の氣に入る者ある迄ハ數人を替るに至る而して女子もまた男子が已の氣に入らざれバ

直ちに去りて他家に婚するの類澤山あり尤も如此きは淡路國一汎の風習なり。同國洲本にては結婚の當日女子の服裝は打掛と唱ふるものを着し紅白の衣服を下衣とし綿帽子を用ゆ又其當日は町内の者共其儀式を見んとて徹夜門前に集り雜言罵詈して障子を破り戸を壞り或ハ新婦を路に要して新郎の家に至るを妨ぐるなどの擧動あり。同國津名郡由良浦天川組邊にては結婚するに同村内の者を撰み女子の諾否如何を問はず媒人等を要せずして夜中突然女子の家に至り連れ來りたる友人等と共に其女を奪ひとりて肩に負ひ男子の家に連れ歸りて強て結婚す而して女子の父兄も咎めず如此きは同郡灘村にもあり之をカタゲと云ふ(成田賢雄君)

日本婚姻諸風俗の研鑽項目は本誌第二十二号にありまた本社に寄せられたる報告は本誌に拔抄したるのち悉く人類學會に寄送せり

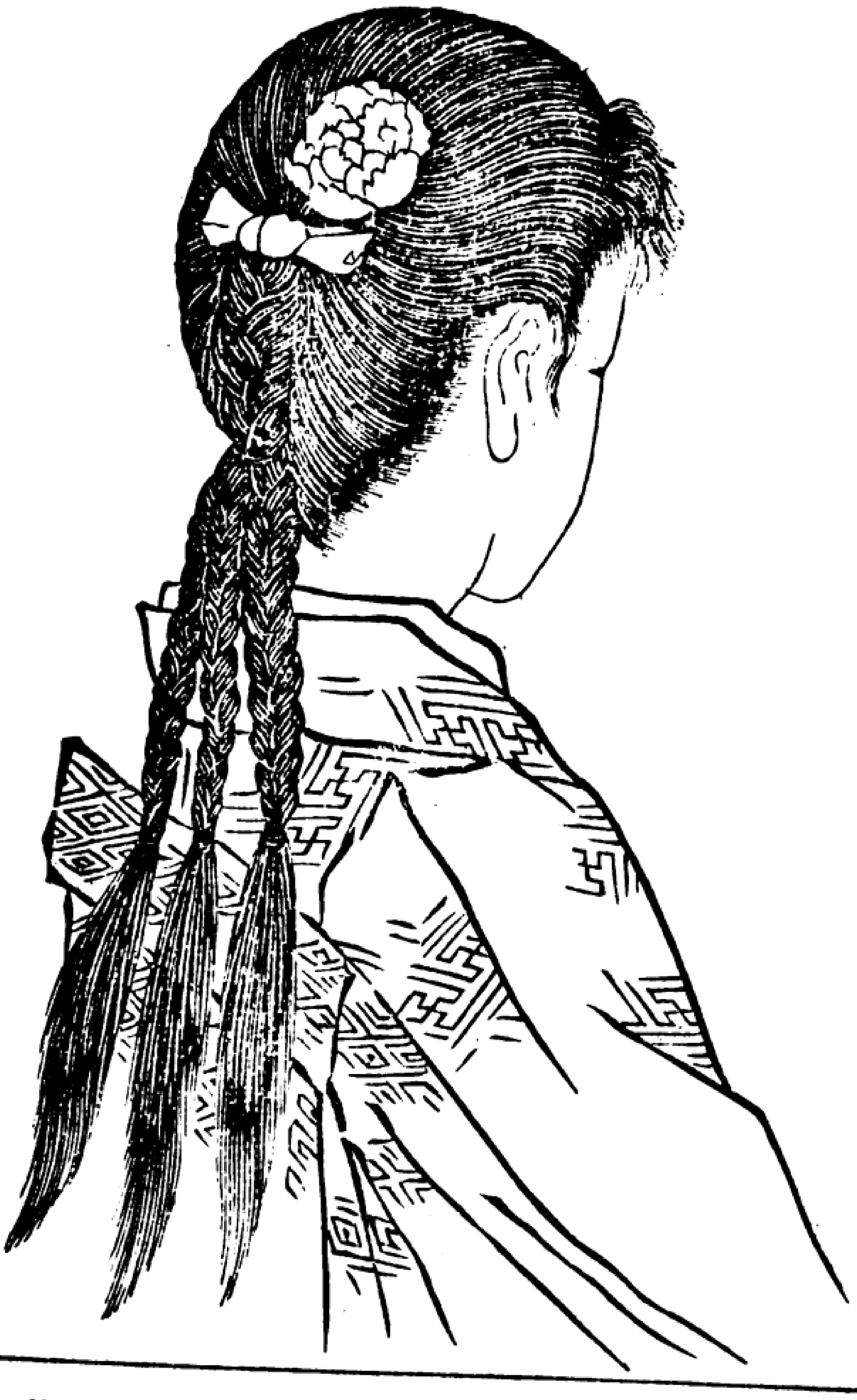
○西洋婚姻談　(第二回)

斯くして親密に交濟を爲す間にも年若者の通弊とて不測の害を惹き起すヿあれば此際必ず守るべき禮式あり卽ち兩人年久しく相知りて余程の交を爲したるものならずば兩人のみにて余り長く談話するヿを禁じ且つ其娘孃の家か踏舞場か奏樂の會か又ハ宴會の場所などにあらざれバすべて今ま一人の居らざるとき相會するを不可とす尤も特別の事情あるときは固より此限にあらざれども斯る折は預め娘孃の家人の允許を受るヿ禮とせるヿなり去れバ如何に相交る自由なる西洋なりとも正當の禮を云へば斯る謹嚴の心得方ありて人の想像する如くみだらなるものにはあらぬヿ知るべし

娘孃ハ男子と所云るコアートシップの交濟を爲す間卽ち共に其人と爲りを知り合ひて緣を結ぶ前の覺悟を定る比ひは娘孃たるものよく男子の行ふ所に注意し特に其の他の婦人に對する行狀を吟味しもし女に信切にして弱きを保護し之を輕んぜざるなどの風あらバ其身を托するも亦た安心なるヿを悟るべし蓋し既に深く交りて愛情の高く湧き出でたる頃ハ彼の男の失も亦た見る可らざるに至るものゆゑ初に於てよく〳〵注意しろの人となりを深く承知せるをよしとす例へバ定めたる時刻に來らざるヿなきやろの氣付方曖昧たるヿなきや年老ひたる人をあしく遇するヿなきや神聖の事を輕しミ教事の會に欠席しがちなるヿなどなきや自己の資力に超えて金錢を使ふヿなきや又は卑しき遊藝を樂しミとせるヿなきや衣物の着方不行儀ならざや其職業に熱心なるや否やなどは類をよく心に覺悟して男子の行狀を吟味すべ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し。又た男子は娘孃が家内に於ての行狀如何其の朋友の評判何如、日常の務を爲すに怠りなきや、其の兩親に孝なりや否や、其兄弟姊妹へのあしらひ何如、性質うつり氣ならざるか、心配がちなるか又ハ忍耐の氣性あるの、其樂みとするものハ家内にて爲し得べきものなりや否やなどの問を心得て娘孃の人となりを吟味することなり」斯て互に相知り相慕ひ則ち結約の事を行ふ也



右束髪の圖解は次号に載するものに併て說明すべし

○音樂の德

本誌十二十三の兩号に音樂の事を述べて女子に此の技藝の適したることをも說き置たれども我國にハ是れ迄三味線と琴とのみ多く流行して其他の樂器ハ余りに用ひられざりしより音樂なるものゝ眞の價値を知るものなく云はゞたゞ女の嗜なみにて一通りの手振りハ心得をくこと大切なれども之を以て國家を益するとう又ハ立身の基とするとの云へる程に深う學びんと思ふものなきハ慨くべきことなり音樂ハ人の心情を動すに最も宜しきものにて理屈もて說く可らず議論にて屈すべからざる頑固の心も洋和たる淸音をきくときハ自然の善心たちまち湧き來りて感情抑ふ可らざるに至る程のものなきバナポレヲンも之を以て善をすゝむる手段とし聖人も樂をもしへて天下を治めんとハ爲し玉へり此故に西洋にても一曲の樂を奏して愛國の士志を勵ましたるなどの例しもまゝあることなり斯れバ溫雅なる婦女ハ演說を以て人心を惹き起さゞとも可なり武張りたる事あらでハ國に報ゆるの道なしとハ思ふ可らず優にやさしき姿のまゝありとも其の纖手を以て奏するところの樂よく百万の兵を起し衆苦ハ惡を去ると得べきなり音樂こゝに至りて其の眞の價値あり此に至りて國家に益ある技藝とハあるなれ婦女子の方々も志を立てゝ其望を大

にしかゝる覺悟を以て音樂を深う學び玉はゞ其の國に盡し玉ふ所男子にもまさるところありと云ふべし而して斯る目的には曾ても述べたる如く淫猥の念を起さすべき三味線、隱屈の心を增さすべき琴、などの適するところにあらず必ずや西洋樂器ならざる可らず故に吾人は婦女子諸君のうち大志を立てゝ音樂を學び玉ふ人あらんことを希ひ亦た琴三味線の早く廢れて西洋樂器の之よ代らんことを望む者なり

●佳傳

○ウイリアム女蠻氏の夫を棄てざりし事

「ウイリアム」は英國の產なり父と共にアメリカ洲デールフイルドに移り住み父そこの地の奉行職たりウイリヤム七歲の時（千七百四年）父もろとも土人の俘虜となりけるが暫らくありて土人も許多の償金を貪りて父は死難に放し還したれどもウイリヤム女の性質伶俐にして容貌の秀美なるを愛し抑留めて還さず年齡長けて或る土人に嫁りのち數年を經て「デールフイルド」の國人を訪ひ其身の轉末を告げゝれバ人々其數奇なるを憫れみ且つ欣び「和女のこゝに來るこそ幸なれ今日より此地に止り再び禽獸に均しき土人の許に皈らざることそよけれ」と說きそゝめたれども「ウイリリム」は更に承諾はず「妾幼稚にして野蠻の俘虜となり終よは其妻となりぬること豈こゝろに滿足すべけんや然りながら一旦同穴の契りをなし既に兒をも設けたるにわが身の不幸を憂ひ夫子を棄てゝこの地に留まるは婦たる者の道よあらず」と袂を拂つて土人の許に皈れりこれを見聞せるものはその意を推し察りつゝ各々淚に袖を濡したりと云ふ

○橘逸勢の女父の配所よ從ひ行きし事

橘逸勢の女は其性至孝なりけるが逸勢の罪を得て伊豆の國に貶竄せらるに方り女痛く悲しみ嘆きて之に從ひ行かんとせしに監護の者叱して隨ふを許さず女乃ち已むを得ず晝止りて夜行き遂に父と相離れずして配所に達するを得たり逸勢の死するに及び其屍を收めて慇懃よ之を葬り廬を墓側に營き守りて去らず自ら髮を削り尼と爲り名を妙沖と改め誓念苦ろに至り日夜少しも懈らず見るもの爲に淚を流せり後に又其屍を負ふて京に還る人皆之を異とし稱して孝女となす

○梅香女史の傳　　月の舍主のふ　錄

第九
貴人を厭ふ月の影
高才を慕ふ燈の下

夏木立いとうものふりたる影にたゝずみて流れ行く月の歩をながめ乍ら手にもちたる團扇をしづめて深う物案ぜる乙女あり鮮

かに澄める月の光に其姿を打ち見やれバ梅姿玉骨と評したる美人ハ斯りけるよと思ハるゝ風情あり丈細やかにて柳の如く淡雅なるハ梅に似たり顔ハ光に照まて白きと梅花の如く髮ハ黑くして漆にて塗りたる氣色あり口元円適ひ共に溫和の性を現ぞーして昔し深殿に養われ玉へる姫の上とも思はるゝに何となう活潑に見えて侵そ可らざる威嚴あるハ學びの道に年を重ねたる故なるべし人あらむとや思ぶらん空をながめてつぶやく樣

靑山さんが御歸の時私ハ卒業した此よりの大事の時ゆゑと御賴み申したともあり特にハ田中さんや古木さんが卒業なすれて直に嫁に入らつしたを共ども足らぬやうに云ひましたにまだ一と月も立たぬ今日となりて早くも緣組などしましたらさぞかし私をも輕ろしみ玉ハんが

と云ひ乍ら暫し默然たりやゝありて二足三足ありき出してまた月をながめ

ろれに彼方ハ文部省にて最早高貴の位にも登り玉ひ洋行より御歸りの後ハ才名も高うなりて云ハゞ早や立身出世したまへるのちなるをわづかに此頃卒業したる私が參りましてハ彼玉の輿に乘るとの諺も少しハ身にあたるやうに思ハるにゝゝゝそして靑山さんとも何日でしたか志をうちあけ願くハ一介の書生までも後來の大志ある方をたのみとしともぐに奮發して身を立て富貴となるにも貧賤となるにも皆な双方の力次第を致し度と約束しましたに斯くそれに地位を得たる方の所にゆくは世の人ころ望む所ならんが私共の素志にハ全く反對するとゆえ先達ても堅く斷ハり濟ましたが

と茲に至りてにハかに顏色を赤らめ身をふるひ乍ら

今晩の話でハ彼方も何か意見が上達せぬとがありとて斷然辭職し玉ひ身を閑居にかくして此より著作に從事し玉ふとろあの樣の才をもち玉ひて御年も若きに早や世をひろみて文筆にのみ日を送り玉ハんは世の爲にハ惜しむべき樣でありますが此の御話をきくとそぞのまゝ私ハなにとて斯まで心が變りましたらぶ彼方ハ最早らゝる身となりて云ハゞ一介の書生のゑ妻と要そるとも無し前にハ達てと懇望申したれど御聞入なうりしが今ハ反つて御幸となりしならん再び國家の益となるべき身分とならバ亦御願もいたし申さん前日の事ハ全く御取消となされたしと御申こしなされたとやら譯を知り玉はぬ母さまと反つて私の承知を遲くしたると今でもの幸との玉へど私ハ今となりてハ前日と全く心が變りましてゝゝゝゝアゝともぐ著作に從事して世の名利に奔走し靜けき心もなき人々

と交を絶ち國家の益となるべき書籍と編まんには此れ種の一樂はありませまいかこれにしてもあの青山さんはかつてあの方の演説をきゝ玉ひしより何となう物のみ思ひたまふはモシヤヽヽヽヽ

此時月は村雲にをほはれて木影にはかゞ色をふかくし庭の景色忽然として暗凄かりけりしかバ心づきて己れ乍らをぞましき獨言よとやゝえみて書齋の椽がはに歸りたるは松本孝が月下の述懷なり此時友を思ふ孝の心よは連りに梅香のとの思はれて今は何如なし玉ふらんなど案じらるゝは平生の信切なるに今夜の心には更に一物の加はりて倚ふから彼の友の思はるゝぞ眞なる斯て夢にやあらん朦朧として三百里外の景色自らに現はれ只見れバ物靜かなる城外の片田舍に昔いかめしき大家ありしが裏手にさゝやかなる書院ある障子を半ば開きて外面をうち見やる一女子あり讀みけたる雜誌を机の上に置きて毅と居直り慨然として思ふやうに見ゆるは

あゝ卓論々々斯まで夫よく述べらるゝもの哉妾等生れて此の時代にあらん限り是非とも此に言ふところの任にあたらざる可らず數千年來身屈れ下に屈したる日本婦人を救ふは實に今日なり實に今日なり會て此の方の演説をきゝたる以來連りにむかし粗暴なりしとを悔みたる余り反對の極にかゝりて思はす多年の志を失ひたり此方の意見もかくあるよな覺に然らん實に然らんあゝ一日も早く歸京して松本さんにも相談し計畫をつくして此に言ふ所を行ふべしまことに多年洋行し玉ひたる彼の方にはさぞかし婦人を見たまふ斯あらん卓論々々

●寄書

○陳言二則

編輯人白す

束髮のとに付ても大坂の山田女史と府下の雪の舍梅君と御意見の違ひしより双方よたびくの御論ひあり爲に世の人の心得となり隨て本誌の面目となりたると多けれども後よは稍や技葉の御爭ひとなりもやせんなど憂へらるゝ人々も尠らず特には梅君も廿二号の文を終りとして復び論じ玉はざとのとなればバ山田女史より之に對する答も參り居り吉田京佐氏よりも亦た御論をよせられ其他に二つ三つの投書あれども暫く此等を掲げざるとと致し其御不平は悉皆編輯人に擔當するとと致せり思ふに梅君其外は我國の女風と改良せんとの熱心より仰さるゝとなり山田女史とても亦た同樣の御志なり特に女史を淡泊の質にて教授の方もひたすら當近の風をとり玉ふときけバ反對の方々の言はるゝ事ども或は失敬の端ともならんかよりて今暫く其御論をあづ

かり置き意見なれども遠からざるうち女風改良の腹稿を掲げ御批評に一に編輯人御引受申度存候也

又た本誌愛讀の方々よ請ふは投書は成るべく短文となしたまひ且つ直接の實益となるべき事々をも多く惠み玉はんことなり要するに今の時に於て日本の女流改革を行はんとす諸君の恩助を蒙ふせざれバ到底一力のよく爲し得べきことにあらざる也

○教育論　　横濱ふゑりす女學校　片山なを

高山ニ登ラサレハ天ノ高キヲ知ラサルナリ深谿ニ臨マサレハ地ノ厚キヲ知ラサルナリ敎育ノ淵奥モ學問ニアラサレハ究ムル了能ハス古來聖賢ノ著ハシタル書籍中ニ學問ヲ勸ムル言語甚タ多シ是皆敎育ハ學問ヲ以テ必要ト爲セシ者ニアラサルナシ蓋シ人ニハ形體ト精神上ニ各種天賦ノ能力備ハレリト雖モ養ナハザレハ開發スル能ハズ是故ニ人自ラ之ヲ學ヒ自ラ之ヲ習ヒ以天稟ノ能力ヲ發育セハ何ソ事業ノ成ラサルヲ憂ヘンヤ若シ之ニ反シテ自ヲ楽テ、顧ミサル片ハ惡念日ニ生シテ天理ニ悖リ人道ニ背キ罪惡百出シテ終ニ身ヲ亡シ家ヲ喪ヒ父母ヲ辱シムルニ至ル可シ豈深ク畏レサル可ケンヤ凡ソ人ノ一行爲一思想一感情ハ悉ク皆慣習ヨリ發出セサル者ナシ是ヲ以テ人ノ初テ生ルヤ庭訓ヲ謹ミ稍長スルニ及テ良師ヲ撰ヒ益友ヲ求メテ邪説悪行ヲ見聞セシメス而ノ後學業工藝ヲ講究セシムルヲ要トスルハ猶芳草ノ嫩芽ヨリ培養ヲ加ヘサレハ美花ヲ開カシムル能ハザルカ如シ是之ヲ敎育ノ法ト云フ○西哲云ク茲ニ一母アリ四歳ノ子ヲ懐キ識時師ニ問テ日ク何レノ時ヨリ敎育ヲ始ムルヤト師答ヘテ日ク汝今日ニ至迄敎育ヲ施サヽルハ既ニ四年ヲ遲クセリ此兒ノ顔上ニ汝ノ笑フ光ノ始メテ照セシ時ヨリ敎育ノ機會ハ始マレリト是レ眞ニ然リ然ト雖モ予以爲ヘラク是猶遲シ其母ノ未タ子ヲ生マサルニ先チ之ヲ敎育シテ純良端正ナラシムルニ在リト何トナレハ母タル者純良端正ナレハ家道齊フ母賢ニ家齊フテ其子賢良ナラサル者殆ント希ナリ兆子已ニ生レテ而後之ヲ敎育ス豈ニ其レ及バンヤ是故ニ古ノ人胎教ヲ重ンス且夫ノ文王孟軻ワシントンハ如何ナル人ソヤ此ノ一聖二賢ハ世人ノ普ク知ル處ニシテ皆胎教庭訓ニ由ラサルハナシ嗚呼敎育ノ効大ナル哉我邦維新以還文化日ニ開ケ敎育ノ法モ漸ク設クト雖モ人才未ダ輩出セザル所以ノ者ハ女子敎育ノ法完全ナラサレハナリ是徒ニ吾儕ノ憂ノミニ非ス實ニ國家ノ憂ナリ世ノ識者以テ何如ント爲ス

○洗濯の心得　　越後古志　鯖川漁夫

白木綿此外絹布に墨のつきたるは乾かざるうちに飯粒をそり付け水にて洗へバ忽ち落ち。白き布などに洋墨のつきたるも硝酸

擦をよきほど水に溶和し塗りつけて石鹸にて洗へバ落ちるなり

○男女思のかけはし　本郷駒込　ゆう

當一日の讀賣新聞になげきの余りと題し貴社雜誌の女學に効能多く甚だ有益なるに係らずかつて廣告にありたる男女思のかけはしを購讀したるに甚だ淫奔にして尤も穢はしき書なりき斯かる書の廣告あるハ何故にやいと惜しむとあり此新聞を一讀ありて可然と存じ候

編者。右ハ第廿号にありし廣告の事ならん弊社ハ專ら道徳を主張するの意見を以て主義とするとなれバ不都合の廣告はすべて謝絶し來るとなるに該廣告文の如きハ表に何樣の說明も見ゑずされバとて一々その書を見たるうえにて廣告する余暇もあらざるより往々かくも素志に違ふとあるなり但し此實際言ハるゝ如きものならバ一讀の上後号に十分批評すべし

○貧ん婆の注意　牛込南町　加藤ひで

小供を脊負ふをん婆さんハ小供の足を兩ひきへ密着させ乍ら上より縛りあるくもの多しそれが爲め成長してより內足となるのみならず自然に發達あしく西洋人ほどに丈夫とならず此よりは成るべく西洋風の手車にでも載せて連あるくやう致したく存候

○牛肉を食ふる事　下谷徒士町の一女子

世が追々と開くるにつれては是非とも食物を改良しなるべく肉食をさかむにすべしなどの議論世間よ多きやう存候に今日に至るも尚ほ古しの風習に制され牛肉を食ふる女子とあれバ何となう卑しむ如き樣あるハまことよ歎かしきとに侍る何卒貴社よても此れ事を御述べありて肉食をさまたぐる舊弊の人れ心を御破りなされたく祈り候

○白雨　横濱市惠利須女學校　平野いま

雲張殺青嶂。傾河雨沛然。須臾天若洗。夕照亂鳴蟬

○同窓の成業を壽て　同　富田ゆき

たゆみなき學びのふしぞまのあたりをしへのにはよたかき此君

○春晝　明治女學校　ゆりう

書房春齋晝無譁。半榻香烟縷々斜。夢學莊周迷未覺。籬攏影裏海棠花

○ひろふ。山家鶯　同　うめ子

春の野よもゆる若菜も摘ためてかへるうなゐやうれしかるらん

世の中のみちたにたえし山里にをるをしれとやうくひすのなく

○ひかな　長野櫻枝町　松戸くめ

春ハくれとまたきにやらぬあひゆきを拂ハゝ若菜もへや出なん

○花、春月　常陸多賀大津　伊藤とく

ろことなき花にこゝろを浮世ろとなかめくくらすみよしのゝ奥

立てめしかすミの衣うすけれハさゝかにもなきはるの夜のつき

○鶯　信州長野櫻枝町　山田りむ

軒ちかくうゑにし梅のふつゑにてハつねハるめくうくひその聲

○學ひの道　府下麴町　岡田せん

怠たらすゝまハ峯にいたるへしまなひの道ハすゝとほくとも

●內國女學校集報（一）

兼てより期圖せる內國女學校の報告は得るが儘に左に集めて讀者の一覽に供ふ茲にハ順序整ハず且つ欠たるも多けれバ掲載せるのち一まとめとしてよく調え合せ一葉の小報に作るべし

但し生徒の人數ハ幹事方より直に聽たるなれバ皆誤なし

女學校名	所在地名	創立年月	教員及姓名	生徒現數	卒業生徒
高等女學校	東京下谷四軒寺町	十七年官立	豊田芙雄、武村ちさ、丸橋ミつ、鳩山みつ、竹内　、加藤　、植村花亭	九五	六
師範學校女子部	同神田宮本町八番地	二年官立	○校長。山川浩○教頭。高嶺秀夫○女教員。上野きん、松岡とハ、植村花亭、福田よね、佐方えつ、藤村はる、合閑きくの、合原こと、榊とく、高田こう、牧野えい、三島ます、	六八	二百一十
跡見學校	同仲猿樂町十五番地	八年私立	○校長兼教員。跡見花蹊（漢學、詩歌書、畵、數學、女藝一切、其他隨意）	一百內通學五十	無卒業期
櫻井女學校	同麹町區中六番町廿八番地	九年私立	○校長。矢島かち○教員。福島（漢學）、田中とし（同）佐々木きん（英學和學）、青木まさ（英學音樂）、峯尾ゑい（英學漢學）、小川とく（同）、小野小春（同）○デビス（英語、音樂）、ミスメルキン（英語、幼稚園）、ツルー（英語其外）	白十二。內通學、五十。	七

女學校名	所在地名	創立年月	教員及姓名	生徒現數	卒業生徒
明治女學校	同飯田町一丁目七番地	十八年九月私立	○校長。木村熊二○講師。イーストレーキ○教員。植村季野、人見ぎん、鬼頭ます○裁縫。ハールス○編物。ワイコッフ○取締。木村とう	四五	無
駿台英和女學校	同神田區駿台袋町十番地	十五年私立	○キッター（英學）ホイットメン（同）○助教。米田たか（英學）、多湖銈作（洋算）、松平りの（裁縫）、荒井平二郎（漢學）○幹事。荒井平二郎	五〇	無
東洋英和女學校	同麻布東鳥居坂町十四番地	十七年十一月美以美教會私立	○校長。カートメル○教員。スペンサア（英學）、カックラン（同助教）、クーゼカックラン（唱歌英學）、水野みね（普通學）、酒井まそ（裁縫兼寄宿舍取締）、都築なほ（和漢學）、露木精一（英學兼監事）、吉村かな（普通學）、本多ゆき（同助教）、得能あさ（同上）	白十一人。內寄宿、四十一人	無
靜女塾	同神田小河町四十一番地	十八年二月私立	○校長。平尾光○教員。平尾光（皇漢學、習字）、赤峯瀨一郎（英語）、樋口五六（數學）、星野富太郎（同）、近藤とく（裁縫）○室長、小山とま○塾監。擣谷やす	二〇	無
長榮女塾	同小石川小日向台町五番地	十六年七月私立	○塾長。淺井さく○教員。石川こと（和漢學女禮式珠算琴）、福島なか（物理博物書）淺井くら（裁縫）、淺井さく（作文地誌習字實地經濟割烹）	一四	二

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○演説著作材料新誌

○第四號發兌○第五號近出

材料新誌は發兌以來世上の好評を博し意外に發賣の數も增加したれバ前号より更に東西人名便覽を附錄としたり
一部定價金十錢。全國無遞送料。六冊即ち半年分前金五十五錢。十二冊即ち一年分前金一圓十錢
見本ハ郵券十錢を送る者に呈そ
送金ハすべて小爲替にて送らるべし

○廢物利用

○一名すたれ物川ひ方○

右ハ元老院議官大鳥圭介君ハ題字あり學農社長津田仙君の序文あり農業雜誌記者巖本善治君の校閲ありて弊社の近藤賢三か編輯したるもの也大凡ろ世に廢きて用ゆ可らさる品々をかゝて有用の途に用ゆると恰も泥土を變じて黃金となし瓦礫をかえて寶玉となすか如し發兌以來世上の好評を得新聞紙上に世論にすでに其價値定まりたれバ復た言ゆと要せぞ不景氣を歎ぞる人殖產興業に熱心する人貧民救助を計畫する人ともに一讀して八十余條の奇法妙術を利用し大に國家の益と興すべし
一部定價郵稅共金五十五錢。送金ハ小爲替なるべし。

○右二書賣捌○ 東京本鄉弓町一丁目廿番地 **女學雜誌社**

○第二回點取文題 女子敎育策

右文題ニ對し寄答の方ハ來る六月三十日迄に其答文を寄送あらんことを請ふ。寄送の答文ハ社評の上優劣と定め甲乙丙三等の点を得る者よハ各左の賞酬を呈す

甲點者	女學雜誌	三十冊	無代價呈上
乙點者	同	二十冊	同
丙點者	同	十冊	同

因に云ふ。第一回點取文始末ハ本誌第二十二号にあり

本鄉弓町一丁目廿番地 女學雜誌社編輯部

○女學雜誌合本

從第十一号 至第二十号

右出來上り候ニ付左れ定價を以て需に應ぞ
別製 定價五十錢。郵稅廿二錢。通運便十錢。
並製 定價四十五錢。郵稅十八錢。通運便八錢。
右の定價及運送賃にて發送いたし候に付御注文の節ハ郵送若くハ通運便何れに致すべきや明記を乞ふ

社告

定價

一冊	四錢	郵稅。一錢	(但府內無稅)
十冊。	卅八錢	郵稅。十錢	(同前)
廿冊。	七十錢	郵稅。廿錢	(同前)
卅冊。	一圓	郵稅。卅錢	(同前)

一ヶ月分 女學雜誌代價	十二錢	府外ハ十五錢
二ヶ月分 同	廿四錢	府外ハ三十錢
三ヶ月分 同	卅六錢	府外ハ四十五錢
半年分 同	六十四錢	府外ハ八十二錢
一年分 同	一圓二十錢	府外ハ一圓五十六錢

廣告

一行	一回 (廿八字詰)	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

但し不道德なる事物の廣告ハ謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送と乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評を

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 (大賣捌)	巖々堂
東京神田區雉子町	團々社支店
同 神田區佐柄木町	東海堂
同 日本橋區新葭町	良明堂
同 日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同 京橋區木挽町壹丁目	萬字堂
同 京橋區銀座二丁目	山口福松
同 本鄉區元富士町	盛春堂
同 本鄉區春木町二丁目	解明堂
同 牛込區肴町	活神堂
大坂備後町四丁目	岡島支店
東京芝西久保櫻川町 (支局)	萬春堂

發行所
本局 東京本鄉區弓町壹丁目廿番地 **女學雜誌社**
持主兼印刷人 瀧田正義
編輯人 巖本善治

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY